

## モチモチの木

斎藤 隆介 作  
滝平 二郎 絵

### おくびよう豆太

全く、豆太ほどおくびようなやつはない。もう五つにもなったんだから、夜中に、一人でせっちゃんぐらいに行けたっていい。

ところが、豆太は、せっちゃんは表にあるし、表には大きなモチモチの木がっ立っていて、空いっぱいのかみの毛をバサバサとふるって、両手を「わあっ」とあげるからって、夜中には、じさまについてもらわないと、一人じゃしょうべんもできないのだ。

じさまは、ぐっすりねむっている真夜中に、豆太が「じさまあ。って、どんなに小さい声で言っても、「しょんべんか。」と、すぐ目をさましてくれる。いっしょにねている一まいしかないふとんを、ぬらされちまうよりいいからなあ。

それに、とうげのりょうし小屋に、自分とたった二人でくらしている豆太が、かわいそうで、かわいかったからだろう。

けれど、豆太のおとうだって、くまと組みうちして、頭をぶっさかれて死んだほどのきもすけだったし、じさまだって、六十四の今、まだ青じしを追っかけて、きもをひやすような岩から岩へのとびうつりだって、見事にやっける。

それなのに、どうして豆太だけが、こんなにおくびようなんだろうか――。



「じさまっ。」

こわくて、びくくらして、豆太はじさまにとびついた。けれども、じさまは、ころりとたたみに転げると、歯を食いしばって、ますますごくうなるだけだ。

「医者様をよばなくっちゃ。」

豆太は、小犬みたいに体を丸めて、表戸を体でふっとばして走り出した。

ねまきのまんま。はだして。半道もあるふもとの村まで――。

外はすこい星で、月も出ていた。

とうげの下りの坂道は、一面の

真っ白い霜で、雪みたいだった。霜が足にかみついた。足からは血が出た。豆太は、なきなき走った。いたくて、寒くて、こわかったからなあ。

でも、大すきなじさまの死んじまうほうが、もっとこわかったから、なきなきふもとの医者様へ走った。

これも、年よりじさまの医者様は、豆太からわけを聞くと、

「おう、おう――。」

と言って、ねんねこばんてんに葉箱と豆太をおぶうと、真夜中のとうげ道を、えっちら、おっちら、じさまの小屋へ上ってきた。

とちゅうで、月が出てるのに、雪がふり始めた。この冬はじめての雪だ。豆太は、そいつをねんねこの中から見た。

そして、医者様のこしを、足でドンドンけとばした。じさまが、なんだか死んじまいそうな気がしたからな。

豆太は、小屋へ入るとき、もう一つふしぎなものを見た。

「モチモチの木に、灯がついている。」



モチモチの木ってのはな、豆太がつけた名前だ。小屋のすぐ前に立っている、でっかいでっかい木だ。

秋になると、茶色いびかびか光った実を、いっぱいふり落としてくれる。

その実を、じさまが、木うすてついて、石うすてひいてこなにする。こなにしたらやつをもちにこね上げて、ふかして食べると、ほったが落っこちるほどうまいんだ。

「やい、木い、モチモチの木い、実い落とせえ。」

なんて、昼間は木の下に立って、かた足で足ぶみして、いばってさいそくしたりするくせに、夜になると、豆太はもうだめなんだ。木がおこって、両手で、「お化けえ。」って、上からおどかさんだ。夜のモチモチの木は、そっちを見ただけで、もう、しょんべんなんか出なくなっちゃう。

じさまが、しゃがんだひぎの中に豆太をかかえて、「ああ、いい夜だ。星に手がとききそう。おく山じゃあ、しかやくまめらが、鼻ちようちん出して、ねっこけてやがるべ。それ、シイーツ。」

って言うてくれなきや、とっても出やしない。しないてねると、あしたの朝、とこの中がこうずいになっちゃうもんだから、

じさまは、かならずそうしてくれるんだ。五つになって「シー」なんて、みっともないやなあ。

でも、豆太は、そうしなくっちゃだめなんだ。



### 霜月二十日のばん

そのモチモチの木に、今夜は、灯がともるばんなんだそう。じさまが言った。「霜月の二十日のうしみつにゃあ、モチモチの木に灯がともる。起きてて見てみろ。そりゃあ、きれいだ。おらも、子どものころに見たことがある。死んだおまえのおとうも見たそう。山の神様のお祭りなんだ。それは、一人の子どもしか、見ることはできねえ。それも、ゆうきのある子どもだけだ。」

「――それじゃあ、おらは、とってもだめだ――。」

豆太は、ちっちゃい声で、なきそうに言った。だって、じさまもおとうも見たんなら、自分も見なかったけど、こんな冬の真夜中に、モチモチの木を、それも、たった一人で見に出るなんて、とてもねえ話だ。ぶるぶるだ。

木のえだえだの細かいところにまで、みんな灯がともって、木が明るくぼうつとかがやいて、まるでそれは、ゆめみてえにきれいなんだそうだが、そして、豆太は、「昼間だったら、見てえなあ――。」と、そっと思っただが、ぶるぶる、夜なんて考えただけでも、おしっこをもらしちまいそうだ――。

豆太は、はじめっからあきらめて、ふとんにもぐりこむと、じさまのたばこくさいおねん中に鼻をおしつけて、よいの口からねてしまった。

### 豆太は見た

豆太は、真夜中に、ひよっと目をさました。頭の上で、くまのうなり声が聞こえたからだ。

「じさまあっ。」

おちゅうでじさまにしがみつこうとしたが、じさまはいない。「ま、豆太、心配すんな。じさまは、じさまは、ちょっとはらがいてえだけだ。」

まくら元で、くまみたいに体を丸めてうなっていたのは、じさまだった。



けれど、医者様は、「あ、ほんどだ。まるで、灯がついたようだ。だども、あれは、どちの木の後ろにちようど月が出てきて、えだの間に星が光ってるんだ。そこに雪がふってるから、明かりがついたように見えるんだべ。」

と言って、小屋の中へ入ってしまった。だから、豆太は、その後は知らない。医者様のてつたいをして、かまどにまきくべたり、湯をわかしたりなんだり、いそがしかったからな。

### 弱虫でも、やさしけりや

でも、次の朝、はらいたがなあって元気になったじさまは、医者様の帰った後で、こう言った。

「おまえは、山の神様の祭りを見たんだ。モチモチの木には、灯がついたんだ。おまえは、一人で、夜道を医者様よびに行けるほど、ゆうきのある子どもだったんだからな。自分で自分を弱虫だなんて思うな。人間、やさしささえあれば、やらなきやならねえことは、きつとやるもんだ。

それを見て、他人がびつくらするわけよ。は、は、は。」

――それでも、豆太は、じさまが元気になると、そのばんから、

「じさまあ。」

と、しょんべんにじさまを起こしたとき。

